

『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』  
平成23 (2011) 年2月8日 起筆、平成23 (2011) 年12月31日 公開、平成28 (2016) 年9月11日 最終更新

岩崎純一

◆趣旨  
九条(藤原)良経、藤原家隆、藤原定家をそれぞれ雪月花に喩えた以下の底本に掲載されている、これら三歌人の和歌を左方に置き、各歌に類似する情趣・歌語が詠まれている過去の自詠歌を右方に置いて、三歌人と相対する一つの仮想歌合および三歌人へのオマージュとした。

『雪月花 絶唱交響 良経・家隆・定家名作選』 塚本邦雄 昭和51年(1976年)3月10日 第1刷 352p 読売新聞社

## 雪の巻

左 後京極摂政太上天(九条良経)	右 岩崎純一
嘉応元(1169)～建永元(1206)。38歳薨去。摂政太上天大臣従一位。後京極摂政、中御門殿とも。藤原道長の血を引く。別号に式部史生、秋篠月清、南海漁夫、西洞隠士。学才早熟で、和歌・漢詩文・書に優れる。和歌所寄人筆頭となり、『新古今集』仮名序を執筆。同集完成後、延期した曲水の宴の開催を見ずに頓死。歌風は高雅・清澄・漢詩的・仏教的。家集『秋篠月清集』1618首。千載集初出、新古今集79首、新勅撰集36首。	昭和57(1982)～。中学時代より伝統和歌と近現代短歌に関心を持つ。20歳頃より伝統和歌に集中して詠草。万葉集、勅撰集、私撰集、私家集や漢詩を自学。藤原俊成、良経、家隆、定家、為兼、源俊頼、正徹、後水尾院、香川景樹らに私淑。万葉調、古今調を経て新古今調に至る。ネット開始を機に歌人仲間との交流を得る。古代・中世の歌壇・歌合・和歌所再現の実験的試みである「余情会(よせいかい)」の開闢(かいこう)。
散る花も世を浮雲となりにけりむなしき空をうつす池水	天つ空身を浮雲のむなしさよ池の心にうつる葉桜
明方の深山の春の風さびて心くだけと散る桜かな	春風は深山さびしき梢経て麓の花も散り乱れつつ
三日月の秋ほのめかす夕暮は心に萩の風ぞこたふる	黒髪の萩ほのめかす夕暮や露の袂にかかる三日月
月宿る野路の旅寝の笹枕いつ忘るべき夜半の景色ぞ	笹枕いも寝られずの月宿り忘るべからぬ旅の景色に
月だにもなぐさめがたき秋の夜の心も知らぬ松の風かな	秋の夜の心なぐさに風更けて松葉のひまに見ゆる月影
ただ今ぞかへると告げてゆく雁を心におくる春の曙	かへる雁おとづれもせずかれし人空のみ見ゆる春の曙
のちの世をこの世に見るぞあはれなるおのが火車を待つにつけても	火車よりこの世のわが身あくがれむのちのあはれに思ひ頼みて
志賀の浦梢にかよふ松風は氷に残るさざ波の声	志賀の浦残る氷のさざ波に人は梢の松風の声
恋ひ死なむ身ぞといひしを忘れずばこなたの空の雲をだに見よ	恋絶えぬこなたの空に日は落ちてそなたに明けぬとはの東雲
友と見よ鳴尾に立てる一つ松夜な夜なわれもさて過ぐる身ぞ	入相の鐘の鳴尾の松が枝を身の夜な夜なに過ぐる音かな
春の花秋の月にも残りける心の果ては雪の夕暮	白妙の花と月とをくりかへし糸の果たてに夕暮の雪
ふるさとは浅茅がすゑになりはてて月に残れる人の面影	人の心浅茅がすゑの空に見つ面影残る秋の月夜に
難波渦まどうら若き蘆の葉をいつかは舟の分けわびなまし	浦波や月照る舟に蘆の声何はのこを海につどへて
朝な朝な雪のみ山に鳴く鳥の声におどろく人のなきかな	山鳥や夜な夜な恋の音になく身遠き道をばともにたぐはむ
夢の世に月日はかなく明け暮れてまはは得がたき身をいかにせむ	いかにせむ命と花の得がたさにのちの世と春さても夢見て
見ぬ世まで思ひ残さぬながめより昔に霞む春の曙	今もまた昔の朝の春霞心は明けぬ夜半の桜も
夏草のもとも払はぬふるさとに露より上を風かよふなり	風払ふ袖より雨のふるさとの下の草葉もわが涙かな
手にならず夏の扇と思へどもただ秋風のすみかなりけり	あつき夜にかをりし床のひと扇今宵になるは風の秋の音
はかなしや荒れたる宿のうたた寝に稲妻かよふ手枕の露	稲妻に宿も袂も荒れにけりはかな手枕露はふるへて
もの思はでかかる露やは袖におくながめてけりな秋の夕暮	暮れかかる露の数ほどもぞ思ふ置きどころなく余る袂に
心には見ぬ昔こそうかびけれ月にながむる広沢の池	昔見し涙の月に似たるかな広沢の池にうかぶ面影
見し秋をなにに残さむ草の原一つに変はる野辺の景色に	草の原秋より先の心見つ景色一つに道を迷ひて
忘れずよほのぼの人を三島江の黄昏なりし葦の迷ひに	黄昏のほの三島江の中空に色人の影の月を忘れず
幾夜われ波にしをれて貴船川袖に玉散るもの思ふらむ	幾峰を越えて今宵に貴船山東も西も袖の水の尾
生けらばと誓ふその日もなほ来ずばあたりの雲をわれとながめよ	もろともに雲となる日は叶ふとも峰に別る世の中の果て
ありし夜の袖の移り香消え果ててまた逢ふまでの形見だになし	昨日まで袖を形見にながめつつ消え果つるまでの夜の移り香
月やそれほの見し人の面影をしのびかへせば有明の空	風の色すこしは秋の有明にしのび片敷きそめし一人寝
恋しとは便りにつけて言ひやりき年は還りぬ人は帰らず	年を経てかへらぬ人に色かへる袖をたよりの恋の残り香
いつも聞くものとや人の思ふらむ来ぬ夕暮の松風の声	今日も聞く来ぬ夕暮の風を浜のうらみの床のうきねに
時しもあれ空飛ぶ鳥の一声も思ふ方より来てや鳴くらむ	思ふ方空に標結ふ中の夜におとなふものは鳥の一声

この頃の心の底をよそに見ば鹿鳴く野辺の秋の夕暮	同じ秋を鹿の心の底に見きさびしき野辺になける夕暮
深き江に今日たてそむる濡標涙に朽ちむ印だにせよ	濡標朽ちて折れても立てかへし思ひ印にまだ舟を見ず
またも来む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ帰る春の曙	来ぬ人をたのむの秋も春過ぎて雁のみ渡る里の曙
雨はるる軒の雫に影見えて菖蒲にすがる夏の夜の月	我が雫する袂に影分けてあやめにうつる夏の夜の月
月宿す露のよすがに秋暮れてたのみし庭は枯野なりけり	袖と庭と秋のよすがはあせ果てぬ揺らぎし月は霜に凍りて
恋ひ死なむわが世の果てに似たるかなかひなく迷ふ夕暮の雲	恋の果てただよふ雲の夕暮ののちまで上の空のさまよひ
月のすむ都は昔まよひ出でぬ幾夜か暗き道をめぐらむ	ふるさとを出でし心はよその星桂の道をめぐるまよひぞ
冬の夢のおどろきはつる曙に春のうつつのまづ見ゆるかな	春の夢を冬のうつつに覚め果ててまだ見ぬ花に聞く霜の声
帰る雁雲のいづこになりぬらむ常世の方の春の曙	春とても覚めぬ常世のなきを知り雁の帰りに残る面影
秋風の紫くだく草むらに時うしなへる袖ぞつゆけき	紫の草の上吹く秋風やむかしに光る時の下露
帰る雁今はの心有明に月と花との名こそ惜しけれ	雁がねは月と花とを折り返し夏の便りになくわが身かな
橘の花散る里の夕暮に忘れそめぬる春の曙	中川も花散る里のうつろひに昔聞こえし袖を忘れじ
いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶ螢かな	思ひ出づ蘆間に螢飛ぶ夜はほの見し影を残す中空
おしなべて思ひしことのかずかずになほ色まさる秋の夕暮	もみち葉の心もろともまさる色をうつす夕暮袖いかにせむ
われかくて寝ぬ夜の果てをながむともたれかは知らむ有明の頃	夕暮は寝ぬ夜の果てを知らざりきわが袖ばかり有明の床
三島江や茂りはてぬる蘆の根の一夜は春をへだて来にけり	蘆の根の夜々を夢路に三島江よ中洲の枕今日も茂らで
嵐吹く空に乱るる雪の夜に氷ぞむすぶ夢はむすばず	雪乱れ嵐の旅の氷にも夢をむすべと庵の萱ぶき
おのづから心に秋もありぬべし卯の花月夜うちながめつつ	我が心卯の花くたす袖の音は秋に尾をひく山ほととぎす
うちしめり菖蒲ぞかをるほととぎす鳴くや五月の雨の夕暮	ほととぎす鳴く音軒端にうちしめり五月雨かをる夕暮の空
それもなほ心のはてはありぬべし月見ぬ秋の塩竈の浦	月も人も闇に松島望みあへず心の奥の塩竈の浦

## 月の巻

左 従二位家隆 (藤原家隆)	右 岩崎純一
保元三 (1158) ~ 嘉禎三 (1237)。80歳薨去。非参議従二位、法名仏性。別称壬生二位。藤原兼輔の末裔で、紫式部の遠戚。晩成型で、のちに良経が若き後鳥羽院に家隆を師として推挙。藤原俊成・定家親子の御子左家と共に新古今歌壇の双璧をなすに至る。和歌所寄人。歌風は幽寂・温雅・壮美・平明。家集『壬二集 (玉吟集)』2895首。千載集初出、新古今43首、新勅撰43首。	同前。
春風に下ゆく波のかず見えて残るともなき薄氷かな	薄氷上の春風面ふれて流れそめぬる明日の下水
思ふどちそことも知らず行き暮れぬ花の宿かせ野辺の鶯	思ふどち春待ち侘ぶる涙かな花の氷に鶯の霜
霞たつ末の松山ほのぼのと浪にはなるる横雲の空	冬越えてなほ松山にほのあけし樞と夜のよその横雲
いかにまた秋は夕べとながめきて花に霜おく野辺の曙	花に霜梢に氷秋かくて冬によすがのあとの夕暮
風吹かば峰に別れむ雲をだにありしなごりの形見とも見よ	明日よりは逢ひこそ峰の白雲に今朝を形見のひまの月影
時しもあれ悲しかりける思ひかな秋の夕べに人は忘れじ	面影や時ぞともなき悲しさを忘れがたみの秋の夕暮
思ひやるながめも今は絶えねとや心をうつむ夕暮の空	思ひ入る草の莖にながめして夢路をうつむ夕闇の空
富士の嶺の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり	胸の富士夜半の高嶺もしのびあへて山路の煙朝消え果てず
谷川のうちいづる波も声立てつ鶯さそへ春の山風	さそへ風山川ばかり春なさで冬かれし床に同じにほひを
梅が香に昔をとへば春の月こたへぬ影ぞ袖にうつれる	人恋ひし伊勢の涙にあともなし昔ばかりにかをる梅が香
誰が秋にあらぬ光を宿し来て月よ涙に袖濡らすらむ	宿るてふ月と袂のかねごとか涙は聞かずかく濡れよとは
逢ふと見てことぞともなく明けぬなりはかなの夢の忘れ形見や	夢もまたことぞともなく明け残り形見顔なる袖と月影
契らねど一夜は過ぎぬ清見瀉波に別るるあかつきの雲	旅なれば枕を涙清見瀉別れし人よ契りむすばで
時も時それかあらぬかほととぎす去年の五月の黄昏の声	黄昏の声は臥しどにほととぎす去年のわが身に五月来にけり
身に近くならす扇も櫓の葉の下吹く風に行方知らずも	髪にさへうつる扇をならしても秋の実近くあする夏の香
唐衣日も夕暮の空の色曇らば曇れ待つ人もなし	唐衣裾引く雲の黒髪待てど涙に曇る下陰
思へども人の心の浅茅生に置きまよふ霜のあへず消ぬべし	人の心浅茅が宿にしにのびあへず消ぬべき霜の声に泣くかな

時しもあれなどあながちにつらからむ秋は夕暮月は有明	憂しつらし涙の空は時分かず春と秋とに宿る有明
入るまでに月はながめつ稲妻の光の間にももの思ふ身の	夜もすがら月出づる夢の稲妻や光の間だに逢ふこともなし
ますらをが端山の照射影消えて知るは命や有明の月	面影の人は心にかがり火の消ゆる命に鹿の巻き筆
昨日だにとはむと思ひし津の国の生田の森に秋は来にけり	露とはで冬に生田の森を見きすみかのあとに霜ぞ迷へる
露や花花や露なる秋くれば野原に咲きて風に散るらむ	恋もまた折々夢に重ね来し咲き渡る露置きまよふ花
夜もすがら重ねし袖は白露のよそにぞうつる月草の花	月草のうつりおきける朝露の夢見しよそに花の残れり
清見渦波も袂も一つにて見し面影を寄する月影	逢ふ夢も波の枕の清見渦袂に影は寄せてかへらず
月もいかに須磨の関守ながむらむ夢は千鳥の声にまかせて	須磨の月夢の直路の関守に鳴くや千鳥の一人寝の床
はかなしな水の浜松おのづから見え来し夢の波の通ひ路	波かかるうきね慣れ来し浜松の水を洩らして夢に通はず
みな月の秋ほのめかす夕暮をさやかに告ぐる萩の上風	月影の下もさやけき萩の風に秋ほのめかす夕暮れの声
天の原空行く月や契りけむ暮るれば白き夕顔の花	月の色を夜々に契りし夕顔も果てぬる花の床の朝枯れ
秋ふかき閨の扇もあはれなり誰が手にふれて忘れ来ぬらむ	秋の閨待つ手になれし扇紙はらめく果てに木枯らしぞ吹く
花はさぞ色なき露の光さへ心にうつる秋の夕暮	散り果つる春の惜しさに似たるかな露をかれゆく月影の色
白波に騒ぐ沢辺の水鳥も玉散るばかりものやかなしき	白波に濡れし水鳥うち羽ぶき沢辺の草葉玉敷きの床
つれなさの心くらべも今日よりはわが身によわる夕暮の空	わが袖も露のゆらぎはよわりそめつれなく凍る冬の片敷き
たまきはる命をあだに行く舟のあはれはかなき波の上かな	たまきはる枕幾夜を舟路にて一人旅寝に乗りしあだ波
誰がなかに遠ざかりゆく玉章の果ては絶えぬる春の雁がね	春の雁送るばかりにまたの秋かへしは添はぬ便りさてのみ
旅寝する花の木蔭におどろけば夢ながら散る山桜かな	山桜散りし木蔭の旅寝より振りさけ上ぐるまぼろしの花
待つ人のくもる契りもあるものを夕暮あさき花の色かな	白妙のくもる契りの暗き雨に袖かをる恋の花の色塗る
桜花夢かうつつか白雲の絶えてつれなき峰の春風	夢うつつ数ふる幾夜白雲に絶えぬは峰の花の春風
明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空行く月のすゑの白雲	旅の先月を隠せる山の端のそれも覆ひし白雲の空
近き音もほのかに聞くぞあはれなるわが世ふけゆく山ほととぎす	春の香の限りも近きほととぎす音も鳴きあへてわが世ふけゆく
しるべせよおくる心の帰るさも月の道吹く秋の山風	来し昨夜は星の道散る光さへ消えかへるさに秋風ぞ吹く
なか絶えし身を宇治橋の川千鳥ふかき霜夜の跡も儚し	忘れし身の宇治川に思ひかけまた渡りてよ橋姫の跡
ながめつつ思ふもさびし久方の月の都の明方の空	久方の都の光ほの見えてあとはながめのさびしさの空
夏果てて誰が山の端に置き捨つる秋の扇と見ゆる月影	夏の影置き捨てがたみ扇ぎ継ぐ秋また月の頃よそにして
ふるさとを思ひあかしの波枕袖の氷に千鳥鳴くなり	きぬぎぬを惜しくあかしの浦見ても千鳥の涙袖凍りつつ
志賀の浦や遠ざかり行く波間より凍りて出づる有明の月	有明や空もさだかに志賀はあれど袖もうつしきうら泣きのゆれ
たのまずようつろふ色の秋風にいざ本荒の萩の上の露	本荒の小萩はしたの秋の色になほなりきらぬ露の上風
恨みても心づからの思ひかなうつろふ花に春の夕暮	あする萩うつろふ梅やさてもなほ心づからにめぐる面影
思ひ入る身は深草の秋の露たのめし末や木枯らしの風	露となりたのめし末もさて置きて伏見木枯らし深草の霜
篠原や知らぬ野中の仮枕松もひとりの秋風の声	秋来ぬやとふより先のそよそよは仮寝の中の篠竹の声
うき枕波に波敷く袖の上に月ぞかさなる馴れし面影	夢にだに逢ふ夜涙のうき枕馴れしは袖の面影の月

## 花の巻

左 権中納言定家（藤原定家）	右 岩崎純一
<p>応保二（1162）～仁治二（1241）。80歳薨去。権中納言正二位。法名明静。冷泉中将（侍従、宰相）、京極中納言（黄門）とも。藤原道長の血を引く。和歌所寄人。歌風は余情・妖艶・有心・象徴美。父俊成の幽玄体を発展させた有心体和歌を提唱。難解な修辞技巧を駆使。家集『拾遺愚草』3752首。千載集初出、新古今集46首、新勅撰集15首。『小倉百人一首』撰者。</p>	<p>同前。</p>
これやさは空に満つる恋ならむ思ひ立つよりくゆる煙よ	くゆり満つ恋の煙のむなしさに立ち別れても思ひ増す影
花の散る行方をだにも隔てつつ霞のほかに過ぐる春かな	散りかをる霞の奥を行方とて残る梢に見ゆるまぼろし
五月雨の雲のあなたを行く月のあはれ残せとかをる橋	五月雨にかをる橋見しあはれ覚めぬるまでの夢の袖の香
これもこれ浮世の色をあぢきなく秋の野原の花の上露	あぢきなく色を浮世にかこちてもまことの道は秋の花の露

暮れてゆく形見に残る月にさへあらぬ光をそふる秋かな	あせてゆく袖の形見と思ひしをあらぬ光に宿る面影
昔思ふ寝覚めの空に過ぎにけむ行方も知らぬ月の光の	寝覚めても月は昔に光るなり人は夢よりほかに見えねど
年経れど心は春のよそながらながめ馴れぬる曙の空	思ひ明かす一人馴れぬる曙は我が身のよその春の梢と
月影のあはれをつくす春の夜にのこりおほくもかすむ空かな	なべて見えず霞みつくせる中かをる梅と月とをまたおほふ空
まどろむと思ひも果てぬ夢路よりうつつにつづく初雁の声	まどろみにあひ通ひ路よとばかりはうつつの春の雁渡る声
ゆく秋の時雨も果てぬたまぐれ何に分くべき形見なるらむ	降りそめて今は夕べに時雨れ果て秋の形見に足る袂かな
しきたへの枕流るる床の上にせきとめがたく人ぞ恋しき	しきたへの流るるほどをせきあへてすがる枕にやむ恋もなし
帰るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月	忘れずは待つも短夜帰るさに袖の有明あひながむらむ
散らば散れ露分けゆかむ萩原や濡れてののちの花の形見に	夜の萩朝の月草摺り分けむ色々うつつののちの形見に
香をとめし袖の声にさ夜更けて身にしみ果つる明星の空	人香なく一人明星しみ果てぬかごと袖に声は聞こえて
霞みあへずなほ降る雪に空とちて春もの深き埋火のもと	もの近きうつつの春を埋めあへず炭火の空に白雪の花
から衣すそ野の庵の旅枕袖より鳴の立つ心地する	面影は羽搔く鳴の片鳴きに袖枕より夢ばかり立つ
かつ惜しむながめもうつつの庭の色よ何を梢の冬に残さむ	露だにも末葉に月を忘れずよ残る梢を木枯らしの冬
夢かさは野辺の千草の面影はほのぼのなびく薄ばかりや	なびく袖薄ばかりにかこちても千草のあとの同じ露かな
一年をながめつくせる朝戸出に薄雪凍るさびしさの果て	薄雪や積もる涙ぞ凍り果つる一年白く尽きてさむしろ
かはれただ別る道の野辺の露命にむかふものは思はじ	別れ路よ命ばかりにむかふとて野辺の枕の露はそむかず
心さへまたよそ人になりはてば何かなごりの夢の通ひ路	なごりなき浜はそなたの袖に見つよそや夢にも波はかへらじ
ふるさとを出でしにまさる涙かな嵐の枕夢に別れて	雨の床嵐の枕目覚めにき恋の旅路を夢に夢見て
忘れずば馴れし袖もや凍らむ寝ぬ夜の床の霜のさむしろ	知らざりき秋になるべき身の果てを寝ぬ夜の床に置きまよふ霜
春の色を飛火の野守尋ぬれど二葉の若菜雪も消えあへず	来ぬ人の飛火野とほき若菜かな二葉も言はじ雪を仇とは
ほととぎす何をよすがにたのめとて花橋の散り果てぬらむ	ほととぎすわが身たぐふは音ばかりやよすがの袖は橋の陰
いかにせむつら乱れにし雁がねのたちども知らぬ秋の心を	雁がねの上の空なるつらはなく時雨の中の葛の下折れ
天の川八十瀬も知らぬ五月雨に思ふも深き雲のみをかな	さみだれて心うつる雲のみを天の足り夜の星逢ひも見ず
さを鹿の鳴く音のかぎり尽くしてもいかが心に秋の夕暮	さを鹿や月の入野の風のうちに鳴く音とまらぬ秋の夕暮
幾秋を千ちにくだけて過ぎぬらむわが身一つを月に憂へて	稲莖千よの諸穂を夢に見き枕一つに片敷きの袖
玉くしげ明くれば夢の二見渦二人や袖の浪に朽ちなむ	玉くしげわが身一つに梳きて寝ぬ二人の契り夢に明けつつ
いかにせむ浦の初島はつかなるうつつののちは夢をだに見ず	とめ果てよ昔寄るべの初島はのちもうき寝の中の床の夜
袖の浦かりに宿りし月草の濡れてののちをなほやたのまむ	藻塩焼くわが身は袖のうら焦がれおもて濡れてのみるめ渚や
誰が方による鳴く雁の音に立てて涙うつろふ武蔵野の原	分けまよふ露の鏡に色なべて月影渡る武蔵野の原
さゆり葉の知られぬ恋もあるものを身より余りてゆく蛍かな	思ひ余る身を白百合の庭の人に葉陰の蛍いかで告げなむ
夢といへどいやはるかなる春の夜に迷ふ直路は見てもたのまず	冬の夢に直路のしをり朽ち果てぬ覚めてつづらの知らぬ行く末
わが恋よ何にかかれる命とて逢はぬ月日の空に過ぐらむ	月も星も雨夜に逢はぬ折ぞある恋や昔の袖にかかれど
おきわびぬ長き夜あかぬ黒髪に袖にこぼるる露みだれつつ	短夜に黒髪の袖明かしけり庭の草葉は露もみだれで
風かよふ花のかがみは曇りつつ春をぞかぞふ庭の缸	散る花の鏡や曇りながめつつかよはぬ庭の床の缸
面影のひかふる方にかへりみる都の山は月織くして	去る人の袖を心にひかへつつ身の上織く残る三日月
霜まよふ空にしをれし雁がねの帰るつばさに春雨ぞ降る	氷雨降る霜のつばさぞとけわぶる羽ぶきも果てぬ帰るさの空
わくらばにとはれし人も昔にてそれより庭の跡は絶えにき	はや染みぬもみぢの色はわくらばにほの見し袖は恋の病に
秋を経て昔はとほき大空にわが身一つのもとの月影	大空やとほき昔はもとにしてちかき袖にはなどうつるらむ
われぞあらぬ鶯さそふ花の香は今も昔の春の曙	さそふ梅なびく鶯夢うつつ尾花と鴟をうつす曙
立ちなるる飛火の野守おのれさへ霞にたどる春の曙	年月よ飛火の過ぎし春霞おのれ立ち出づる同じならひに
須磨の浦藻塩の枕とふ蛍仮寝の夢路侘ぶと告げこせ	夢に侘び明石の渚須磨の浦藻塩の空に消えぬ蛍火
秋といへど木の葉も知らぬ初風にわれのみもろき袖の白玉	初風に袖の白玉もろき末は木の葉時雨も同じ冬かな

『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』

さざ波や鳩の浦風夢絶えて夜渡る月に秋の舟人	月うつる鳩の浮き巢の風の音にまよふうらみは夜半のさざ波
袖に吹けさぞな旅寝の夢も見じ思ふ方より通ふ浦風	今もなき涙の平瀬最上川出でしみなとは袖の浦風
今はとて鳴も立つなり秋の夜の思ひの底に露は残りて	人とはず鳴立ちかへり袖の沢沈む心は秋の夜の底
行き帰る果てはわが身の年月を涙も秋も今日はとまらず	寄せ返る涙に出づる舟旅のわが年月は果てもとまらず

岩崎純一のウェブサイト

<http://iwasakijunichi.net/>